1．「水とともに」の連載をして

野　口　幸　重　（信濃毎日新聞社・報道部）

信濃毎日新聞は1989年１月１日から、長期大型キャンペーン「水とともに」を繰り広げてきました。社会面の連載企画（1990年２月までに１１部９３回）をメーンに、毎週日曜日付け生活圏版で、県下各地の身近な川を見開きでワイドに紹介する特集「ふるさとの川」、毎月１回、カラー写真で県外の水辺再生の取り組みをルポする「水の声」を同時進行。「まとめて出版を」といった投書が来るなど県民の反響は大きく、改めて県民の水や河川をめぐる問題への関心の強さを感じています。

連載を始めるに当たり、私たちは①川はコンクリートで固められて汚水の排水路のように、湖は“たらい”のように改修され、今日、水辺環境の再生を望む「親水」がひとつの流行語になっている②野尻湖の淡水赤潮発生（88年夏）や、水源汚染の住民不安を招いているゴルフ場開発問題などから、信州の上流域が新たな危機を迎えているように見える－といった現状について論議した結果、連載企画の基本テーマを次の２点としました。

A．水辺の潤いある自然環境を取り戻したい

B．上流県・信州の川や湖を汚染から守りたい

本社の取材チームだけでなく支社局の記者も参加、学習会を開いたりして、それぞれ身近な水問題に目を向け、報道しています。

社会面の　これまで11部のタイトル・連載回数、基本テーマ別の分類、掲載時期は次の通りです。

①岸辺のメッセージ・８回（A）＝89年 1月
②上流域のシグナル・10回（B）＝89,2
③生き物のサイン・７回（A）＝89,3
④木曽谷に流れを・10回（A）＝89,4
⑤飲み水ピンチ・８回（B）＝89,5
⑥廃水の迷い道・９回（B）＝89,6
⑦水辺の再生・８回（A）＝89,8
⑧水源とゴルフ場・10回（B）＝89,10
⑨押し寄せる廃棄物・９回（B）＝89,12
⑩スイス西独では・７回（A）＝90,1
⑪川はだれのもの・７回（A）＝90,1

これまでに取り上げたテーマから、主な内容を拾うと－

①岸辺のメッセージ

・農具川（大町市）の改修

・松川（白馬村）の住民運動の芽生え

・工場の発電のために水を奪われた高瀬川、青木湖

②上流域のシグナル

・淡水赤潮が発生した木崎湖

・北ア山小屋のし尿処理、だれが費用負担を

・ゴルフ場開発に不安

③生き物のサイン

・人工ホタル水路と飼育箱の中のホタル

・サケ復活キャンペーンの壁

・流れの多様さに生きるザザ虫（天竜川）

④木曽谷に流れを

・清流復活運動

・水と緑

・愛知の水ガメ

⑤飲み水ピンチ

・硝酸塩汚染、トリハロメタン－塩素神話のほころび

・地下水捨ててダムに過大投資

・浄水器－現代の悲しい落とし子

⑥廃水の迷い道

・下水道に流す水がない

・終末処理場の汚泥処理、合併処理浄化槽

・農村の水循環「肥だめ」の思想

⑦水辺の再生

・桜並木に抜き取り命令（樽川）

・木崎湖のヨシ植栽、裾花川の環境整備

・川の釣り堀化に待った（雑魚川）

⑧水源とゴルフ場

・テトラと農薬（大町市居谷里水源と開発問題）

・講演会合戦、過疎村の悲哀（同）

・災害誘発。カネにならない山林と農地。アセスメント

⑨押し寄せる廃棄物

・反対運動噴出、首都圏からの大量流入の背景

・「安定型」処分場に不安

・水を守る施策と秩序づくりを

⑩スイス西独では

・スイスの近自然工法

・ボーデン湖

・山岳の下水管

⑪川はだれのもの

・水利権

・河川法

・電力と環境

シリーズ「水とともに」には読者の皆様から手紙・ハガキやら電話で様々な反響が寄せられています。

例えば－

(1)用水で泳ぎ、遊んだこども時代が懐かしいという30ページに及ぶ回想文

(2)発電のために水が収奪された高瀬を私も悲しく思うという切々とした手紙

(3)「海へ直行する水路と化したような川に疑問が沸いてきました」（小学校教諭）

(4)砂利採取により数少ない昔の川の面影が消えていくのは寂しい（会社員）

(5)水問題で学習会を開いたり、住民運動を始めることになったという知らせ（県下各地から多数）etc

今後、このキャンペーンは上流域の汚染対策や潤いある水辺環境づくりのための提言編を考えており、今年前半まで続ける方針で準備をしています。

取材してきた側からの感想を、最後にまとめます。

［川の排水路化］私たちの身近な川や用水路は、次々にコンクリートの直線水路に改修され、汚水と余った雨水を捨てるだけの排水路となった。水遊びや魚捕りをしたり、食器や野菜を洗い、歯を磨き顔を洗った川や水路は、過去のものになりつつある。その変化は急に進んだ。

［失われた水循環］水道の普及により、何より大切な飲み水が、蛇口ひとひねりで与えられるようになった。その結果「川も湖も汚しても大丈夫。飲み水は幾らでも安心して得られる」－そんな錯覚が蔓延している。汚した水が実はまた、どこかで人間の口に帰って来るというサイクルが忘れられている。

水道普及の一方で農村は衰退した。かつては水を大切に使い、雑廃水もし尿も畑の肥料に還元し、汚水を川へ流さずに土に返した。廃水を出さなかった農村の水循環は失われ、水道普及とともに汚水は「水に流せ」となった。水道が普及する一方で、水を捨てることはおろそかにされ、飽食時代の雑廃水の垂れ流しが続いている。下水道処理水もし尿処理水も最後は結局、川か湖に捨てられる。

水質汚濁の６割を占めるという家庭廃水の流入で、川の「三尺流れれば水清い」の自浄作用では間に合わなくなった。と同時にいたるところでコンクリート三面張りの「排水路化」が進み、自浄能力も低落した。

［洪水ピーク］川の排水路化はもちろん治水が目的だ。直線のコンクリート水路は目の前から洪水が早く流れ去っていくかもしれないが、一気に強く流れるようになって、下流の洪水ピークの山は高くなり、飯山水害（昭和57・58）のような事態を招く。

かといって川を連続堤防で締め切り、早く海へ捨てようという治水の論理はいまさら急には変わらない。川の本来の氾濫領域に都市がべったり張りついてしまったから、かつての霞堤のように、洪水と共存することは不可能になっている。

また上流域の山林開発で山の保水力を衰えさせておいて、そのツケを川に押し付けている。これも洪水ピークの山高くさせている。

［水とともに］汚水と洪水を流すという機能だけで川を作り替えてきた結果、水はますます汚れ、新たな洪水の危険を大きくするという弊害が生まれた。

自然な川の領域をもうすこし認めてやり、水辺の自然環境の再生に向かうことは、きれいな上流域の水を守り、人間生活と地球環境が共存する一歩にもなりはしないか。

私たちのキャンペーンについて積極的に御意見をお寄せくださいますようお願いします

第1部

岸辺のメッセージ

水とともに・・・1

題字は山野井竹堂氏

農員川にホタルの声を聞いた

生活映す水面見据えて

暮らしに蛍がいっぱい。踏みつぶさないように歩くのが大変なほど。郷の校に群れている蛍を、小学生のなる字が「クリスマスツリーみたい」と言った。

「蛍の宿は川端柳」とよく言ったもんだよ」。大町市役所に勤める坂田悦男さん(56)は思った。市東部を流れる農員川のほとりで生まれ育った。「あんなゲンジボタルの乱舞は初めて見た」。昨年七月の夜のことが忘れられない。昨春亡くなったばかりの百瀬先生(渉さん、当時七十七歳)に見せたかった。

百瀬さんは元中学校の校長。五十七年に発足した「大町市の水を美しくする会」のリーダーだった。坂田さんは発足当時からのメンバーの一人。蛍の乱舞を見て、六年にわたる自分たちの運動が間違っていなかった、と改めて感じた。だから、百瀬さんの顔がすぐに浮かんだのだ。

百瀬さんは、よく言っていた。「ものを言えない川や、魚や、蛍の声を聞きなさい」。坂田さんはその夜、蛍の声を聞いた思いがした。

＊　＊

土手を歩くと、水の冷たさが心地よさそうに遊ぶウグイの群れが見える。農員川は延長約十四キロ。そのうち中流部の一キロ足らず、幅四―五メートルが自然工法による改修区間。昔から伝わる「木工沈床」という工法をとっている。木枠を組んで中に石を詰め、土手から流れに二メートルほど突き出した形で沈めている。これが八十―一メートル間隔で、両岸に並ぶ。水が流れる「瀬」に対し、よどむ「淵」(ふち)を、あえて形づくっている。

もともと農員川は蛇行した川だった。それが治水工事の改修の際に直線化された。「木工沈床」の採用は、いわば本来の流れに戻そうとの抵抗の一つだった。

さらに、もっと大きな意味もあった。一部分とはいえ、両岸をコンクリート化するのを防いだ。行政の立場と、百瀬さんや坂田さんらのグループとの攻防。それは、五年にも及んだ。農員川が魚族保護を主眼とした河川改修工法のモデルとして、全国に知れ渡ったゆえんだ。農員川の改修工法は、新たな自然、人と水とのかかわり方をも教えてくれる。

だが、農員川は例外中の例外。多くの河川は改修によってコンクリートで固められ「排水路」と呼んだ方がよくなる。水が流れ、よどみ、曲がりくねって、飛び散る…。草木が覆う水面下で魚が群れる川の姿は県内から一つ、また一つ消えている。

＊　＊

余暇時代を背景に、暮らしにゆとりをもたらすものとして、河川や湖沼―水が見直され始めた。都市化が進んだ地域では、喪された空間として岸辺が注目されてもいる。自然散策や魚釣り、バードウオッチング、スポーツ…が楽しめる場所。さらに郷愁を誘う景観。だが、水を取り巻く状況は私たちの期待に背く方向に進んでいるように見える。

姿を変えているのは河川だけではない。諏訪湖でも、コンクリート護岸は浸食の岸辺を削り取った。魚や水鳥が棲つ水草帯は消え、トンボの姿が激減した。栄養塩類を吸収する豊かな水草帯「葭のエゴ」を埋め立てて下水処理場が出来た。

水の汚れも依然、進んでいる。水質の良さを誇っていた野尻湖で、さらに木崎湖でも赤潮が発生したことは象徴的だ。

もともただせば、水の汚れは人間生活と深くかかわっている。水を中心とする豊かな自然を守ろうとすれば、私たちは水の「出口」をしっかりと見据えなければならない。家庭や工場からの除水浄化はもちろん、水源地保全は緊急の課題だ。

県下のゴルフ場予定地では昨年、「水を守る」運動が十数カ所で二年に噴き出した。殺虫剤などの農薬による水源汚染が懸念されるためだ。

高原野菜地帯に大量にまかれる農薬や肥料、最上流の山小屋のし尿処理の問題も、ここ数年クローズアップしている。

＊　＊

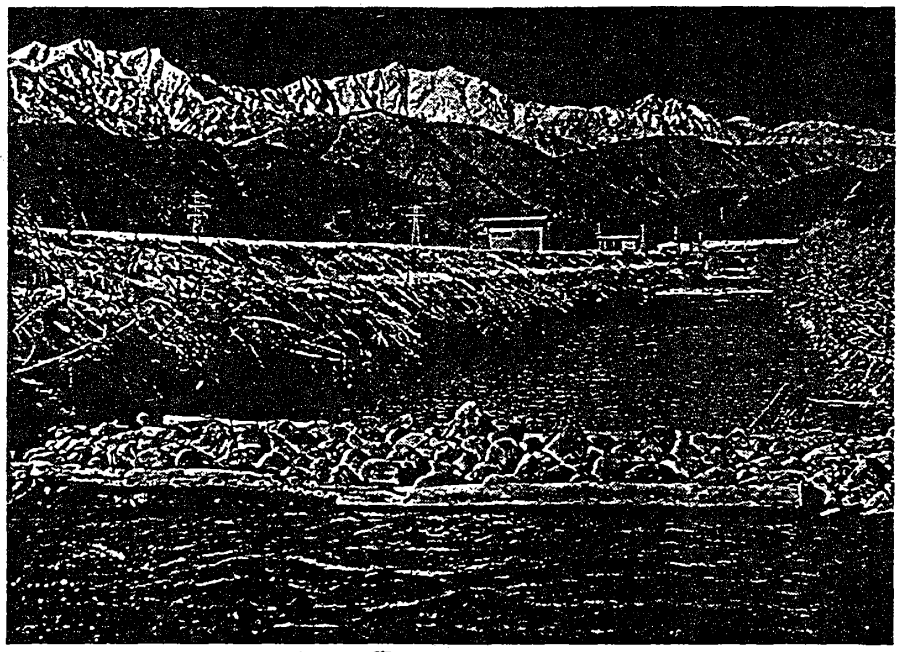
「水の惑星」といわれる地球上には十四億立方キロの水がある。しかし、大半が海水が極地の氷で、人々の身近にある真水は、川や湖に地下水などを含めても、地球上の水の〇・八%にすぎない。その「〇・八%」が、汚染され、あるいは、自然をゆっくりはぐくむことなく海にどんどん捨てられる方向にあるー水の今の状況は、こう言っても過言ではないのではなかろうか。

「近代科学技術の盲点ですよ。自然の富は収奪してもし切れない、廃棄物はいくら捨てても大丈夫…。科学技術はこの二つの前提に立ってきた。河川工学も同じで、金が費い、サケがモ上する水辺の生命の環境を断ち切ってきた。自然の生態と環境まできめた体系的な水辺への視点は無かった。水は地球環境と生命の源なのに」。新潟大の大熊孝教授(河川工学)は警告する。

農員川を最初の足がかりに、大町・北安曇地方を歩きながら川や湖沼、水と人々のかかわりを考えてみよう。

(山野井氏は元県書道協会長)

「水とともに」は、このシリーズのほか、毎日曜「生活圏版」で身近な河川の現状をワイドにルポ、月一回、全国の「親水運動」の試みをカラーグラフで紹介します。



魚群れる淵　北アルプスのふもと大町市を流れる農員川。上流の改修部分にも木枠に石を詰めた「木工沈床」があり、貴重な魚種の保護に努めている

水とともに 80

第10部 スイス・西独では

河川改修にも影響調査

いったんコンクリートで固められた川を、自然に近い姿によみがえらせる。湖の浅瀬を法律で保護する…。アルプスのふもとで潤いのある岸辺を取り戻そうとする試みが始まっている。こうした動きは、技術大国ニッポンが忘れかけた水とのかかわり方に多くの示唆を与えている。スイス、西ドイツから、水を守り、水と共生する取り組みを報告する。

（渡辺秀樹記者）

さらさらと心地よい水音が、村の静けさを引き立てる。スイス・チューリヒ市郊外のワイン産地、マルターレン村。白壁にえんじ色の板で縁取りをした幾何学模様。レンガ屋根。窓には赤いゼラニウムの花々…。

古くからの家並みを残す人口千五百人足らずの村に、騒動が持ち上がったのは十年近く前のことだ。

「いやあ、あの時は驚きました。この川を数倍に広げたうえ、コンクリートで固めるって言うしゃないですか。とてもこの村の風景に受け入れられるものじゃありませんよ。だから、私たちは反対運動をしたんだ」。自宅の庭先を流れる幅三百足らずの小川を指さしながら、反対運動のリーダー格だった農業ウルスラー・リップスさんが振り返った。

＊　＊

アルプスの雪解け水を集めて流れる小川は、古い水車小屋の前を通って、美しい家並みを縫うように走り、村の広場を抜ける。ちっぽけな存在ではあっても、村の雰囲気を醸し出す重要なアクセントなのだ。

チューリヒ州建設局が、小川の改修案を立てた。以前から、川幅が狭いために増水時にはあふれ出して、家の床下まで浸水することがあった。州が流域につくった自動車道の雨水が加わり、浸水は頻繁に起こるようになっていた。

州建設局はこれまで手掛けてきた手法と同様に、まず川幅を拡張して、垂直のコンクリート護岸で固める「安全で強固な」改修プランを示した。それが、住民運動に押される形で村会に否決されたのだ。

改修を担当する州建設局河川維持・建設監督課のクリスチャン・ゲルディー課長は当時、建設局に入局して間もなかったが、村会否決には少なからずショックを受けたという。「村の安全を最優先したプランなのに…」

＊　＊

一九八三年、スイスでは環境保護法が施行され、開発事業にあたっては、事前に環境に及ぼす影響を予測調査する「環境調和テスト」（UVP）が盛り込まれた。長野県の環境影響評価（アセスメント）制度が発足するちょうど一年前のことだ。

こう着状態に陥っていたマルターレン村の河川改修は、このUVPの試行例として取り上げられることになった。ポイントは「景観」「生態」だった。

河川技術者だけでなく、景観学者、生態学者らも加わった研究グループが組織され、代替案が検討された。その結果、すべて拡張しなくても、上流に増水時の水をためる調整池を造ることで、流量は制御できることが分かった。護岸が必要な部分は自然石を積んで周囲の景観との調和を図るなどの最終案が示され、村は村民集会を開いてこれを承認した。

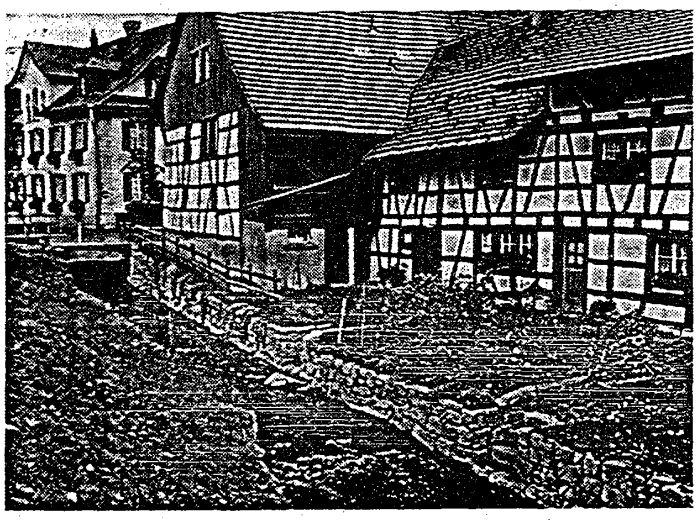
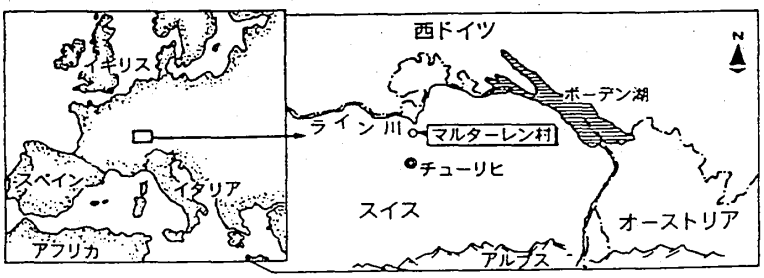
＊　＊

川幅が極端に狭かったリップスさんの家の前は、増水時の水を地下に通す方法で「景観を壊す機械的な拡張」を免れた。「満足しますよ。これが広げられてごらんなさい。水の少ない時はそれこそ、川底をちょろちょろはうだけで、不自然じゃないですか」

何の不思議もなく、どんどんコンクリート三面ばりに変えられていく日本の川。県のアセスも河川改修までは対象としていない。

しかし、チューリヒ州では、「マルターレンショック」をきっかけに河川行政は大きく転換することになる。

（題字は元県書道協会長、山野竹楚氏）



守られた景観　日本でいえば「環境アセスメント」の適用で改修されたスイス・チューリヒ州マルターレン村の小川